

部かたく一部 pseudofluctuating tumor が脾全体に及ぶ cystadenocarcinoma で scinticamera 所見と一致した。次の症例は急性腹痛にて入院血清および尿中 amylase が典型的な急性脾炎の経時的な推移を示した症例で発病約 100 日目後のカメラ像では RI の uptake はほとんど見られず 1 年経過後ではほぼ正常に近い脾影を見た。上腹部腫瘍患者の脾 scinticamera による脾原性除外例で、症例(2)(3)(4)のように、臨床上、また血管造影で、脾原性疾患が疑われたが、scinticamera にて、正常脾をえ手術の結果、腸間膜淋巴巴腺転移、胆のう癌の後腹膜淋巴巴腺転移、結石を伴なった胆のう炎の症例である。また症例で見られるように脾尾部の下方偏位が見られ剖検では胃癌腫瘍圧排像と判明した。このように従来、除外診断の対象として、脾腫瘍疾患を積極的にその存否をきめる有力な情報を他の検査法に比して、提供してくれるものと思われる。結論として(1)脾癌の脾 scinticamera 像を分類して例示した(2)脾 scinticamera 像が除外診断に有効である症例を例示した、(3)脾 scinticamera 現出不能の原因について考案した。(4)脾炎の診断治療経過の判定その機能診断に利用でき、(5) scinticamera による脾臓影の利点を強調した。

質問：水野義晴（大阪大学西川内科）

私達は ^{75}Se -methionine による脾 scanning は脾癌を疑える患者のみに、hypotonic duodenography, pancreozymin-secretin 試験、angiography を施行した後、行なっている。8, 9, 10, 度の演者の方に脾 scanning をする対象の選択基準および retained activity の検定に対しご意見を伺いたい。

答：川名正直（千葉大学放射線科）

脾スキャンの症例としては主に脾癌の疑いのある症例に対して行なっている。脾炎の症例もあるがそれほど多くない。しかるチソウの検査にセレノメチオニンを用いても差しつかえらいと考える。

答：寛弘毅（千葉大学放射線科）

脾スキャニングは患者に与える侵襲が少ないので、ある程度ルーチンに検査ができる。脾に残る放射能については組織的に研究を行なったことはないが、残留の量はそれほど心配することはないと思う。

*

*

*

*

*

*

*

11. ^{131}I エリスロシンによる脾スキャニングの試み

川名正直 寛弘毅 有水昇

館野之男

(千葉大学 放射線科)

最近脾臓造影剤として研究されているテトラヨード系のエリスロシンBに ^{131}I をラベルしたら脾臓スキャンができるのではないかと考えられ第一化学でこれを作つてもらい臨床例 8 例について実験を行なった。

使用量は 500~800 μCi 静注でありシングルカメラで経時にスキャン像を追求した。

なお ^{198}Au , ^{75}Se -methionine, ^{131}I -Rose-bengal によるスキャンを行ない比較検討を行なった。

その結果完全に脾臓を描記できたものは 1 例もなく、3 例に脾臓に担当する部に陰影あり、他の 5 例は全く脾臓を描記できなかった。

これらの症例を ^{75}Se -methionine でスキャンするといづれもよく描記されておりエリスロシン B は今の段階では脾臓用アイソトープとして臨床には使いえない。

しかしマウスによる実験では脾臓にも排泄されていることは証明されており比放射能、スキャン技術の向上等によって脾臓スキャンができるようになると考える。

エリスロシン B で肝臓はよく描記できるが胆嚢は描記されずこの点はローズベンガルと異なる点である。

経時に追求すると腎臓、膀胱、および腸を経ての排泄の状態がわかり脾臓以外のスキャンも可能であり脾疾患以外の診断に用いることもできると考える。

質問：西畠次郎（神戸大学 放射線科）

1) 動物実験における ^{131}I . B. の pancreas での radioactivity 静注後どの時期で最高となるか。

2) 臨床例における最良とおもわれる投与量、投与方法、スキャニング時期をお教え下さい。

答：川名正直 動物実験における脾臓への uptake に関しては動物の種類、アイソトープの量によってどの位の時間でもっともよく集まるかは異っていると考える。午後種々の動物実験によってどの位の時期に scan したら適当か検討する積りである。

*